



## Osaka Gakuin University Repository

Title	“The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究 永遠のイノセンスへの試み A Study of “The Island of Doctor Death and Other Stories”: Wolfe’s Attempt to Protect Innocence
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 67 号 : 1-22
Issue Date	2014.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# “The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究 永遠のイノセンスへの試み

山 口 修

## 序

若きアメリカにとって、アメリカ文学における「無垢と経験」は重要なテーマであった。成長を求めながら無垢を失わないことをも望むというアメリカが持つ相反する課題を、アメリカ文学は主要なテーマとして扱ってきた。吉田純子は、アメリカ児童文学の多くが、「アメリカのアダム」という神話作りに荷担したと述べ、その特徴として、「純粹無垢な子どもが悪徳や矛盾にみちた『大きな世界』に直面し、苦悩の試行錯誤のすえ、ついには自らの汚れ無き魂を賭けて『世界』と渡りあい、折りあい、『成長』をとげるという基本プロット」(7) を持つと指摘する。そして子どもは「成長とひきかえに無垢を喪失し、子ども時代の終焉をむかえる。子どもはついには自分をとりまく社会に『めでたく』加入する」(7-8) と述べているが、一方で、「アメリカは、旧世界の悪徳と決別して自らを『汚れなき国家』として規定したはずなのに、『成長』するためにどうして徽章である『無垢』を失わねばならないのだろうか」(8) との疑問を呈している。

この矛盾に対し、アメリカ文学は様々な試みを行ってきた。例えば、Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* (1885、以下 *Huck Finn*) の Huck のように文明社会から逃亡したり、あるいは J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951、以下 *The Catcher*) の Holden のように療養施設に入ったりと、様々な形でその矛盾を当面は回避するような方法がとられてきた。しかし、彼らはいずれそのような逃げ場を失ってしまうのではないかという懸念を読者は

払拭できない。

一方、Gene Wolfe の “The Island of Doctor Death and Other Stories” (1970) は、「無垢と経験」のこのような矛盾を解決するための一つの方法を提示しているように思われる。この作品は、他の Wolfe の作品同様、様々な視点から読むことができ、多様な解釈が可能である。本論では、この小説をイニシエーション・ストーリーとして捉え、主人公 Tackie がどのような経験をし、その経験によってどのように成長したのか、またその成長を援助する Dr. Death がどのような役割を果たしているのかを中心に、他のイニシエーション・ストーリーと比較しながら考察したい。そして、アメリカ文学が内包する「無垢と経験」という矛盾を Wolfe がいかに克服しようとしたのかを明らかにする。

## 1

田村晃康は日本における「イニシエーション・ストーリー」という用語の使用法には曖昧性があると指摘しているが、まず、「イニシエーション・ストーリー」という用語について定義しておきたい。本来「イニシエーション」という言葉は、文化人類学的に、「修練者が厳しい試練を経て、一人前のおとなとして社会集団に受け入れられること」であり、「そこでは精神的な成熟の達成が、社会の正規の構成員として認められること」(45) という意味を持っており、共同体を脱し、異界での試練を経験した後、再び社会へ再統合されることを意味している。本論では、このような文化人類学的な定義ではなく、「一連の試練による、再生と呼んでよい著しい精神的変化・成長と、その結果としての maturity の達成」(48) という田村の定義に従い、「子どもが、既存の価値観に対して何らかの揺さぶりをかけられ、価値観の見直しをせまられるような経験をする」と定義し、「イニシエーション・ストーリー」は、「その経験を通じて子どもが大人に近づく物語」としておく。

また、本論では、「イノセンス」という語については、*Oxford English Dictionary* の “Freedom from sin, guilt, or moral wrong in general; the state of

being untainted with, or unacquainted with, evil” という定義、つまり「邪悪なものに染まらない純粋無垢な状態であること」を意味するものとして用いる。同時に、純粋さによる「無知」＝「善悪の区別も付かない」というネガティブな面も含むものとする。

元田脩一は『エデンの探求』の中で、William Faulkner の短編 “The Bear” (1942) と Twain の *Huck Finn* を取り上げ、Isaac、Huck という主人公たちにとって、Sam、Jim というそれぞれの援助者が主人公たちの成長に重要な役割を果たすことを詳細に検討している。<sup>1</sup> イニシエーション・ストーリーを成長の物語と考える場合、子どもが全く援助者なしで成長するという物語はあまりなく、主人公が様々な経験に直面する中で、少なからず主人公を援助するメンターの人物が登場する。まずは、イニシエーション・ストーリーの例として、Twain の *The Prince and the Pauper* (1881、以下 *The Prince*) を、次に Salinger の *The Catcher* を取り上げ、メンターの果たす役割がどのように主人公の成長に影響するのか、考えていきたい。

*The Prince* は、二人の主人公、王子 Edward と乞食 Tom Canty が衣装を取り替えることによって起こる混乱を扱った物語である。ここでは、王宮から市井の乞食の境遇へと投げ出された Edward が、そのメンター Miles Hendon との共同生活を通してどのように成長していったのかを中心に考える。以前拙論で Hendon の役割について考察したが、ここで Twain の理想とする教育の実践者という役割についても一度振り返っておきたい。<sup>2</sup> *The Adventures of Tom Sawyer* (1875) や *Huck Finn* で示されるように、Twain は Miss Watson や The Widow Douglas の施す日曜学校の教育に見られるような教訓に満ちた教育や、大人の既成の価値観を教え込むような教育には批判的であった。このような Twain の考え方は、Jean-Jacques Rousseau の教育思想を反映していると考えられる。

Rousseau の教育思想の根底にあるのは、子どもの自主性の尊重と経験の重視である。子どもの成長には経験が必要であるが、無防備なまま社会に出て行

くと社会悪に直接さらされてしまい、教育上望ましくない。したがって、教育する大人の側が、理想的な環境を作り出し、その中で子どもを教育すべきだと考えた。この思想には、経験に裏付けられない知識を教えることは望ましくないという考えも含まれており、日曜学校的教育への批判にもなっているように思われる。<sup>3</sup>

*The Prince* の中で、Hendon は、Edward に出会った当初から、自らを王子と名乗る Edward の態度への違和感を表明しながらも王子の前では完全な忠誠を誓っている。

Poor little friendless rat, doubtless his mind has been disordered with ill usage. Well, I will be his friend; I have saved him, and it draweth me strongly to him; already I love the bold-tongued little rascal. . . . And what a comely, sweet and gentle face he hath, now that sleep hath conjured away its troubles and its griefs. I will teach him, I will cure his malady; yea, I will be his elder brother, and care for him and watch over him; and whoso would shame him or do him hurt, may order his shroud, for though I be burnt for it he shall need it. (138)

ここに見られる Hendon の視線の根底にあるのは、社会の害悪から無垢な子どもを守ってやらなければならないという、子ども＝純真無垢とする思想である。Hendon は次々と起こる困難な場面で、王子の前では、自分は王子の家臣であるとの演技を続けながら、時に罪人として鞭打たれながらも、王子の自主性を尊重し王子を導いて行く。

王子 Edward は、宮廷では知り得なかった市井の人々との生活を通して、これまでは想像もできなかった庶民生活の実態を体験し、新たな価値観を得る。こうした経験を経て宮廷に戻った後、社会に善政を施すことになる。

この *The Prince* という物語において、王子は統治者として社会を変化させ

るための能力をもっていた。王となった Edward の生きる社会は、まだ王という指導者を必要とする社会であり、Edward の試練は文化人類学的なイニシエーションの意味合いを多少なりとも持ち得ていたともいえるだろう。

次に *The Catcher* について見ていこう。主人公 Holden は、自分の周りのあらゆるものを “phony” と呼び、社会へ適応することを拒否する。彼の周りにも教師と呼ばれる大人たちはいるが、彼らの声は Holden には届かない。それはなぜか。例えば、退学を前にして Holden が挨拶をしに行った歴史の Spencer 先生は、Holden を “boy” と呼び、Holden が落第した理由が彼自身にあることを、彼が答えにくい質問を執拗に重ねながら、自覚させようとする。“I’d like to put some sense in that head of yours, boy. I’m trying to help you. I’m trying to *help* you, if I can.” (20) という言葉には Holden も認めるように嘘はない。しかし、視線を下げて、Holden と向き合いたいという彼の思いを窺うことはできない。“put some sense in that sense of yours” という言葉こそ、大人の価値観をそのまま子どもに押しつけようとする態度の象徴だからだ。教師という立場は往々にしてそのようなものであるが、イニシエーション・ストーリーにおけるメンターの態度としては、子どもに受け入れられるものではない。そして最後の “Good luck!” (21) も相手を気遣っていることを示す言葉ではあるが、一方で、自ら積極的に相手に関わっていこうとする人が使う言葉ではないだろう。

また、Holden がニューヨーク市街を放浪したあげくたどりついた Antolini 先生も、“The mark of the immature man is that he wants to die nobly for a cause, while the mark of the mature man is that he wants to live humbly for one.” (244) だの、“if you have something to offer, someone will learn something from you. It’s a beautiful reciprocal arrangement. And it isn’t education. It’s history. It’s poetry.” (246) などと、熱く語るだけで、Holden の話には興味を示さない。Holden が語る弁論表現の時間の経験談、本当に語りたいたいと思っていることを語る少年に、要点をはずしているという理由で容赦

なく“Digression!”(238)という言葉を投げつけ続けるクラスの雰囲気、これこそが Holden が最も嫌がる価値観の一方的な押しつけである。学校に適應できない理由の本質がこのエピソードに隠れているにも関わらず、Antolini 先生はそのことに気づかない。このように Holden が頼っていった先生たちとの会話は、結局、Holden にさらに大人の身勝手さを知らしめる結果になってしまったように思われる。

本作品を Saul Bellow の *The Adventures of Augie March* (1953) と比較した論の中で、新田玲子は次のように述べている。

結局、＜インチキな＞人々は、アメリカ社会の本質が物質的な競争社会で、自己中心と弱肉強食の原理で動いていることを示し、そこでうまく事を行うには、時に、冷酷で身勝手になることも必要だと、行為者ホールデンとオーギーに教えようとする。ふたりは＜インチキな＞人々がインサイダーとして、社会の中で意味のある活動をしていることを理解しており、彼らの主張にはそれなりの正当な裏付けがあることも承知しているが、現実のそのような実態を是とすることもできないし、それに無条件に荷担することを潔しともしない。従って、＜インチキな＞人々と主人公たちとの心理的葛藤は、アメリカ的競争社会が要求する自己中心的な生き方と、そこでもたらされる物質的豊かさや華やかさと、競争社会において軽んじられがちな弱い者をいたわる優しさや思いやりのような内面的資質との、二項対立を鮮明化して見せる。(225-26)

大人たちはアメリカ的な物質的競争社会が要求する生き方を、つまり大人の側の既成の価値観を Holden に押しつけてくるため、彼のメンターとして機能することはなく、Holden が大人に近づく契機は失われてしまう。

しかし、物語の最後の場面で、妹 Phoebe が回転木馬に乗り、身を乗り出して金の輪を取ろうとする姿を見て、突然彼は危険を冒さずして何かを得ること

はできないことに気づき、自分が望んだライ麦畑の捕手という存在は実現不可能であることを悟る。ここで重要なことは、イノセンスを維持したまま大人になることは不可能であるという現実、大人ではなく、イノセントな **Phoebe** によって気づかされたことである。王子 **Edward** は自ら得た価値観を社会に還元するという形を物語の時代設定上、取り得た。しかし、**Holden** が得た認識は、その矛盾の解決方法が存在しないということである。新田の指摘する二項対立を解消する方法は現実には存在しない。その結果、**Holden** は施設に入り、拙論で述べたように、自分が守ろうとしたイノセンスの語り部となることで、その矛盾を解消しようと試みるのである。<sup>4</sup>

以上見てきたように、子どもの成長の物語において、メンターの役割は大きいといえるだろう。イニシエーション・ストーリー、特に子どものイノセンスを重視する物語において、子どもの成長を促すために大人に求められるのは、子どもの視点に立ち、教化という形で教え込むのではなく、様々な経験をさせることを通して子どもたちが学ぶよう、見守ることであるように思われる。

## 2

では、**Wolfe** の “The Island of Doctor Death and Other Stories” について詳しく見ていこう。**Wolfe** について、柳下毅一郎は次のように述べている。

ウルフは「何を書くか」しかなかった SF 界に「いかに書くか」を持ちこんだ作家である。そして「いかに書くか」だけでも SF は書けると証明して見せた作家でもある。ウルフはしばしば信用できない語り手、あるいは視点人物を設定し、彼らの目を通すだけで世界はまったく異なって見える、と示すのである。(中略)

ウルフはしばしば文系 SF 作家と呼ばれる。それは文章に対するこだわりのせいでもあり、同時に人文科学の教養—言語学や歴史、文化人類学に対する深い興味と該博な知識—のおかげでもある。(62-63)



ここでも触れられているように、Wolfe は「いかに書くか」ということ、そしてフィクションの機能について強く意識していたことに留意しておきたい。Wolfe の小説は博学に裏打ちされたもので、初めに述べたように難解で、多様な読みが可能であるが、本論では、主人公 Tackie のイニシエーション・ストーリーとして、特にメンターとしての Dr. Death の役割に注目しながら読んでいくことにする。また、メタフィクションの構造が、いかに「無垢と経験」という矛盾を解消していくか明らかにしたい。

冒頭から、この物語は舞台の枠組みを曖昧にしていく。二人称現在という語りの手法が用いられているが、若島正が「一人称的な少年の視点で記述することを前提としながら、そこから距離を置いて少年の視点ではとらえられない部分まで記述する自由を留保した語り方」で、『タッキーが眺めた世界』と『タッキーが知り得ない世界』との差異が前景化され、大きなテーマとなる(238)と指摘するように、主人公の主観的視点と、客観的描写との間に生じるずれにより、物語内の出来事の曖昧性がより強調される。

語り手は、主人公 Tackman Babcock が砂浜に名前を書き、それが波に消される様子を語るが、名前が消されるという行為によって主人公のアイデンティティが曖昧になることが暗示される。次に、舞台となる Settlers Island が通称であり、名前もなく、地図上にも輪郭が書かれていないと語ることで、場所の曖昧性が強調され、現実と空想の境目が希薄になっていく。そしてさらに、彼の家の名が“The House of 31 February”(12)と名づけられていることから、時間の概念さえも曖昧にしていくのである。このように、この作品のフィクション性が予め強調されていることに注意しておく必要がある。一方で、Settlers Island は、島とは名が付くものの満潮時に陸から切り離されるだけで実際には大陸とつながっており、若島が言うように、Tackie が「否応なしに現実世界とのつながりを持たざるをえないことも暗示」(241-42)している。

この物語において、イニシエーション・ストーリーの重要な要素としてのメンターは誰なのか。Tackie の周りにいる大人たちを見ていこう。最初に登場

するのが母親の愛人らしき Jason である。砂浜に名前を書き終えた Tackie が家へ戻ると、Jason は Tackie を町へ連れ出す。しかし、自分の用事が済むと Tackie の “Are we going home now?” という問いかけにも “He nods without looking at you” (12) と、無言で答えるだけでほとんど関心を示さない。にもかかわらず、Tackie がドラッグストアで見つけた本を盗み、Tackie に手渡ししながら、“You going to tell your mom how nice I was to you?” (13) と、自分が良い人物であることを母親に伝えるよう促す。そして、“You got a nice, soft mommy, you know that? When I climb on her it’s just like being on a big pillow.” (13) と母親との性的関係をほのめかし、Tackie を不快にさせる。

このような男と付き合っている母親は無気力で、Tackie に対して無関心なわけではないが、積極的に彼に何かをしてやることもない。昼食のため外出しても、周囲が結婚させたがっている Dr. Black との対話に興じているだけだ。二人の叔母も、母親を再婚させることに熱心で、Tackie への関心は低い。一方、父親は離婚して別居していることが後に触れられるが、この物語において Tackie の父親は完全に不在である。

そのような孤独な生活を強いられる中、前述のようなやり方で手に入れた *The Island of Doctor Death* という本の登場人物たち、Captain Ransom と Dr. Death が物語の枠を越えて、Tackie の世界に出現する。

最初に出てくるのが Ransom である。寝起きで気分のすぐれない母親から階下へ行くようにいわれ、ベランダから海を眺めている時、漂流する筏に乗って岸に近づく Ransom を見つけ、Tackie は浜辺に駆けおる。

“Pleased to meet you. You were a friend in need there a minute ago.”

“I guess I didn’t do anything but welcome you ashore.”

“The sound of your voice gave me something to steer for while my eyes were too busy watching that surf. Now you can tell me where I’ve

landed and who you are.”

You are walking back up to the house now, and you explain to Ransom about you and Mother, and how she doesn't want to enroll you in the school here because she is trying to get you into the private school your father went to once. (15)

大人たちから疎外されていた Tackie にとって、Ransom の感謝の言葉は、自らの存在を肯定してくれる言葉だった。初対面であるにも関わらず、自分がおかれた境遇を語り出す Tackie が、いかに会話に飢えていたかを表している。

一方、Dr. Death は、H. G. Wells の *The Island of Dr. Moreau* (1896) に登場する Dr. Moreau を思わせる人物で、Tackie の読んでいる *The Island of Doctor Death* の中では、動物を改造して人間を創り出し、自ら “I am God and Nature is Adam.” (15) と語るように、悪の権化のような人物として描かれている。

昼食の席で母親に話しかけようとするが、叔母から外で遊んできなさいと命じられ、Tackie は展望台へ出る。

You put the toes of your shoes in the wire and bend out with your stomach against the rail to look down, but a grown-up pulls you down and tells you not to do it, then goes away. You do it again, and there are rocks at the bottom which the waves wash over in a neat way. . . . Someone touches your elbow, but you pay no attention for a minute, watching the water.

Then you get down, and the man standing beside you is Dr. Death. (16)

展望台の手すりから身を乗り出そうとすると、大人にすぐに引きずり下ろされ、そんなことをしてはいけないと言われるが、その大人はすぐになくなってしまふ。そして再び手すりに足をかけたとき、Dr. Death が現れる。身を乗

り出す Tackie に博士は降りろと命ずることはなく、“Good afternoon, Mr. Babcock. I’m afraid I startled you.” (17) と語りかける。“Mr. Babcock” と名前前で、しかも一人前の人間として話しかけているところは重要である。前述の、危ないことをしている少年に通り一遍の注意をして立ち去ってしまう大人の振る舞いとは対照的な接し方を博士がしているからである。

Ransom と Dr. Death との出会いの場面を比較してみよう。Ransom の場合、“He [Captain Ransom] holds out his hand and says, ‘Captain Ransom,’ and you take it and are suddenly taller and older; not as tall as he is or as old as he is, but taller and older than yourself.” (14-15) と、Tackie が大人の姿になると描かれている。一方 Dr. Death の場合は、“He [Dr. Death] smiles at you, but you are no older.” (17) とあるように、Tackie の姿は元のままである。この違いは、どこから生じているのだろうか。Dr. Death の登場シーンに次のような描写がある。

He [Dr. Death] has a white scarf and black leather gloves and his hair is shiny black. His face is not tanned like Captain Ransom’s but white, and handsome in a different way like the statue of a head that used to be in Papa’s library when you and Mother used to live in town with him, and you think: Mama would say after he was gone how good looking he was. (16-17)

博士の容姿は、Tackie の父親の姿と比較され、その類似性が強調されている。博士には父親像が付与されているため、Tackie の姿は子どものままなのではないだろうか。博士は登場シーンから、Tackie を導く者として描かれているのである。

若島は、メタレプシスという作品構造からも、『デス博士の島』という書物が、タッキーの現実認識のあり方に影響を及ぼす。言い換えれば、『デス博士

の島』はタッキーの現実世界に差し出された鏡に他ならない。そして、デス博士はタッキーの導き手となる」(239)と述べ、Dr. DeathがTackieの指導者の位置を占めることを指摘している。<sup>5</sup>一方、Ransomは、冒険者で、悪に立ち向かういわゆる子どもが憧れるヒーローであり、少年Tackieの理想とする自己像と考えられるかもしれない。自分の姿が反映されているが故に、彼はRansomに合わせて大人の姿になるのではないだろうか。

以上見てきたように、Tackieの周りの大人たちは、彼に対する関心度がとても低く、物語の中の人物RansomとDr. DeathだけがTackieをまともに見ていることがわかる。特にDr. Deathには、父親像が与えられ、Tackieを導く役割が与えられていることが明らかで、彼がメンターであると考えていだろう。

では、次にDr. Deathによって、Tackieはどこへ導かれていくのかという点を考えていきたい。若島は*The Island of Doctor Death*は「善悪の判別がつきにくい物語」で、「その曖昧性は、デス博士の創造物である、人間とも獣ともつかない獣人たちに具象化されている」(239)と述べるが、そのことと関連づけながら、以下、詳細に見ていく。

Tackieが読んでいる本*The Island of Doctor Death*の中で、捕らえられていたRansomは、Dr. Deathによって人間に改造された元セントバーナード犬の獣人Brunoに助けられる。Ransomの“Why did you free me?”との問いかけに、Brunoは“You smell good. And Bruno does not like Dr. Death.”(20)と答える。それに対して、Ransomは“Dr. Death should have known better than to employ his foul skills on such a noble animal. . . . Dogs are too shrewd in judging character”(20)とBrunoの犬としての能力を高く評価する。

そして、Ransomは同じようにDr. Deathに捕らわれていた女性を助けようとするのだが、Brunoは、

Unexpectedly the dog-man halted in front of him, forcing Ransom to

stop too. For a moment the massive head bent over the unconscious girl. Then there was a barely audible growl. “You say, Master, that I can judge. Then I tell you Bruno does not like this female Dr. Death calls Talar of the Long Eyes. (20)

と、その女性の素性の怪しさを Ransom に訴える。

Talar と呼ばれるその女性は博士が住む島の支配者の末裔で、Ransom に、Dr. Death から島を取り戻す助けをしてくれるように頼む。その際も Bruno は次のように警告する。

Bruno plucked at Ransom’s sleeve. “Do not go, Master! Beast-men go sometimes, beast-men Dr. Death does not want, few come back. They are very evil at that place. (22)

にもかかわらず、Talar の “You will lead us against Dr. Death? We wish to cleanse this island which is our home.” (22) という依頼に、“Sure. I don’t like him any more than your people do. Maybe less.” (22) と、Ransom はその申し出を受け入れる。

もし Bruno の指摘が適切であるとすれば、Talar の住む都の住民は “very evil” (22) な存在である。獣人たちにとって “evil” な存在であるということは、互いの敵対関係を示すことになり、Talar のいう “cleanse” は、Dr. Death はもちろん、彼が創り出した獣人たちの浄化を意味する。先住民としての立場から自分たちの島を害する者たちと敵対することは、ある意味当然であり、“cleanse” という意味は、博士一味を一掃し、島を取り戻すことと考えれば理解できないことはない。

しかし、この “cleanse” の意味は、次の文章が示すコンテキストの中に置くとは別の意味をもつ。

“You see me, and I might be a woman of your own people. Is that not so?” . . .

“Very few girls of my people are as beautiful as you are, but otherwise yes.”

“And for that reason I am high priestess to my people, for in me the ancient blood runs pure and sweet. But it is not so with all.” Her voice sunk to a whisper. “When a tree is very old, and yet still lives, sometimes the limbs are strangely twisted. Do you understand?” (22)

長い年月を経て、不純なものが生じ、自分の思い通りにならないものが出てきており、そのような存在をも “cleanse” したがつているとも読める。つまり、彼女に従わない住民の浄化をも意味することになる。Bruno のいう “evil” が、敵対者というニュアンスから発せられたものではなく、Talar や彼女が率いる集団の一部が文字通り「邪悪」な存在であるということの意味することになる。そのように解釈すると、Ransom が Talar を手助けするということは、Talar への反逆者を浄化することに Ransom 自身が手を貸すことを意味する。

ここまで、*The Island of Doctor Death* という物語の読者（Tackie 及び私たちも含めて）は、Ransom 対 Dr. Death という対立構造の中で、邪悪なものとの対決し、女性を助ける善良なる主人公として、Ransom を読んできているはずである。しかし、この Talar の発言を受け、読者は Talar の援助者としての Ransom の行動の是非について、再考をせまられる。Bruno の判断を信じるなら Ransom は善人である。しかし、はたして、Talar に与するという Ransom の行動は正しいのか、と。

このように、読者は、*The Island of Doctor Death* で善悪の判断への再考を促されるが、Tackie の世界でも同様のことが起こる。Tackie の家で開かれているドラッグパーティーらしき会場に Dr. Death が現れ、Tackie を母親のいる部屋へと連れて行く。

“Come on, Tackie, there’s something I think you should see.” You follow him to the back stairs and then up, and along the hall to the door of Mother’s room.

Mother is inside on the bed, and Dr. Black is standing over her filling a hypodermic. As you watch, he pushes up her sleeve so that all the other injection marks show ugly and red on her arm, and all you can think of is Dr. Death bending over Talar on the operating table. You run downstairs looking for Ransom, but he is gone and there is nobody at the party at all except the real people . . . (24)

母親の結婚相手となる Dr. Black が、母親に怪しげな注射を打っている。会場にいるはずの Ransom を見つけ出せなかった Tackie は、会場の人たちは信用できないと感じたのか、隣家の女性に助けを求め、その女性は警察を呼ぶ。警官は Tackie に “Dr. Black was only trying to help your mother, Tackman. I know you don’t understand, but she used several medicines at once, mixed them, and that can be very bad.” (25) と説明する。しかし、若島が「タッキーは、『デス博士の島』では悪人のように見えるデス博士に明らかに魅惑されている」(239) と指摘するように、Tackie は Dr. Death を信頼しており、警官の説明に納得しているようには思われない。

ここで Dr. Death が Tackie に示したものは何か。それは、善悪の相対化ということである。医者である Dr. Black が、母親へ害を及ぼしていること。これが事実かどうかの最終的な判断を読者は下せない。しかし、善悪の価値観は絶対的なものでなく、見方によっては、逆になることもあり得ることを Dr. Death は示したのである。

Dr. Death に捕らえられ危害を加えられる女性という物語の役割から、何の考慮もなく我々は、Dr. Death = 悪、Talar = 善という判断を下す。しかし、その読みは、Bruno や Talar の言動によって相対化される。同じように、Dr.



Black= 医師=善、Dr. Death =悪という図式も、Dr. Death による犯行現場の暴露という行為によって、その位置関係は逆転する。こうして、何が善で、何が悪かという価値判断が留保されるのである。多くの物語に見られる、最後には悪は滅ぼされ善が勝つといったステレオタイプな結末が、ここでは相対化される。<sup>6</sup>

さて、最初の質問に立ち返ろう。Dr. Death は、Tackie をどこへ導こうとしたのか。この物語がイニシエーション・ストーリーだとすると、Tackie はどのような価値観の見直しをせまられたのか。今まで見てきたように、Tackie は善悪が相対的であることを学んだ。そして、もう一つ彼が学んだことは、物語の最後の場面から読み取ることができる。

[Y]ou pick up the book and riffle the pages, but you do not read. At your elbow Dr. Death says, “What’s the matter, Tackie?” He smells of scorched cloth and there is a streak of blood across his forehead, but he smiles and lights one of his cigarettes.

You hold up the book. “I don’t want it to end. You’ll be killed at the end.”

“And you don’t want to lose me? That’s touching.”

“You will, won’t you? You’ll burn up in the fire and Captain Ransom will go away and leave Talar.”

Dr. Death smiles. “But if you start the book again we’ll all be back. Even Golo and the bull-man.”

“Honest?”

“Certainly.” He stands up and tousles your hair. “It’s the same with you, Tackie. You’re too young to realize it yet, but it’s the same with you.”

ここで、Tackie は *The Island of Doctor Death* という物語の結末で Dr. Death が死んでしまうであろうことを予感する。Dr. Death に、“And you don’t want to lose me? That’s touching.” (25) と感じさせるくらい、Tackie は彼に魅せられ、彼を愛している。しかし、彼はその「愛するものの死」を直接体験はしない。つまり、この時点で Tackie はその場面を読んではいない。「愛するものの死」という経験をする前に、Tackie は、物語の構造として、最後まで読み終えても冒頭から読み返せば死者は生き返るということを博士から教えられている。

さらに付け加えるなら、Dr. Death が最初に出てきた場面で、Tackie が、Ransom があなたを殺すかもしれない、というのに対して、“Hardly. You see, Tackman, Ransom and I are a bit like wrestlers; under various guises we put on our show again and again—but only under the spotlight.” (17) と、自分たちの関係がレスラーのように演じられたものに過ぎないと、物語内での二人の行動はあくまでも演技に過ぎないことが示唆されている。

本来、「愛するものの死」の経験は、子どもに大きな試練を与え、イニシエーションの契機となり得る体験である。母親を死へと導くような Dr. Black の行動も、Tackie にとって試練である。しかし、Dr. Death は、その経験が少年にとって打撃を与えるような経験にならないよう、予めそれを乗り越える方法を提示している。また Death という名が示す恐怖も、博士との対話でその人間性に触れ、馴致されているように思われる。

このように、Dr. Death は、Tackie を教化するのではなく、経験の場において、*The Prince* の Hendon のように、やさしく見守るように彼の恐怖を取り除いている。話も聞かず、大人の論理で説得を試みる *The Catcher* の先生たちとも異なる。母親が本当にドラッグ中毒者であったのか、Dr. Death は本当に物語の中で死んでしまうのかといった、事実だとすれば Tackie のイノセンスを傷つけてしまうような疑問への解答はこの物語では明らかにされない。その結果、Tackie のイノセンスはそのまま保たれていると考えていいだろう。

Tackie は社会に潜む悪意について完全にイノセント（無知）なわけではない。少なくともそのようなものが存在することを認識することが、この物語における Tackie のもう一つの成長とっていいだろう。しかし、Dr. Death という保護者によって、経験の直接的な汚染から守られ、暗示はされるがそれを実体験として経験する前に、つまり精神的なダメージを受ける前に、イノセンスを保ったまま、物語の冒頭へとループされることを示唆されることによって、Tackie 自身はその体験を直接経験しなくてもよい状態になる。このように、Dr. Death も Rousseau 的教育の実践者の一人なのだ。

物語を終わらせるのではなく、ループさせるということが重要である。なぜなら、読者は物語が終わった後も続きを想像してしまうからだ。実際にはまだ逃げ出していないにも関わらず、インディアン地区へ逃げ出す Huck を想像し、精神が癒えた後、社会復帰するであろう Holden を想像する。しかし、物語の結末を冒頭へループさせることを示唆することで、*The Island of Doctor Death* も “The Island of Doctor Death and Other Stories” も、物語は終わらず、反復する。なぜなら、この物語は現在形で書かれており、この物語はまだ語り終えられていないからだ。そうして、佐々木敦が『『読者』に対して、つまり『私』に対して、紛れもない一種の攻撃を仕掛ける、すこぶる能動的でパフォーマティブなメタフィクション』（197）と評するように、読者をも巻き込んで、この物語の主人公 Tackie は、語り続けられる物語のループの中でイノセンスを保ち続ける。<sup>7</sup>

Holden は社会悪を実体験し、その上でそれを乗り越えなければ大人になれないことを悟る。にもかかわらず、その乗り越えを行わず、イノセントな子どもたちの物語の語り手となって、当面は社会で生きていくという方法をとった。しかし、Tackie の場合は、イノセントな物語の物語内に生きる子どもとしてそのイノセンスを保持するという戦略をとることで、成長しつつ、イノセンスを保つというポジションを獲得したといえる。

## 結 論

以上見てきたように、Tackie は、*The Island of Doctor Death* という物語を読むという経験、Dr. Black の母親への行為を目の当たりにするという経験を通して、世界に存在する悪意を認識すると同時に、善と悪は相対化し得るものだということを学ぶ。しかし、その悪意への直接の接触からは、Dr. Death によって保護され、Tackie 自身のイノセンスは守られる。そして、二つの物語、*The Island of Doctor Death* と “The Island of Doctor Death and Other Stories”、のループを示唆することで、Tackie のみならず、Tackie の物語を読む我々も彼のイノセンスの保護に一役買うということになる。Wolfe は、ここまでやってのけたのである。

## 注

本稿は2013年12月14日中・四国アメリカ文学会冬季大会（於安田女子大学）での研究発表に加筆修正したものである。

- 1 元田脩一『エデンの探求—アメリカ小説の一特質』（開文社 1963）参照。
- 2 山口修「*The Prince and the Pauper* 研究—Miles Hendon の役割について」（『大阪学院大学外国語論集』第41号大阪学院大学外国語学会 2000）参照。
- 3 Rousseau については、林信弘『「エミール」を読む—ールソー教育思想入門』（法律文化社 1987）を、アメリカの教育における Rousseau 思想の影響については、遠藤恭二監修『新版—子どもの教育の歴史—その生活と社会背景をみつめて』（名古屋大学出版会 2008）、遠藤克弥・森田希一「ジェファソンからマンヘ—アメリカ教育思想形成過程に関する一考察」（『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第29号1989）を参照。
- 4 山口修「*The Catcher in the Rye* における Innocence 喪失のプロセス」（『中・四国アメリカ文学研究』第34号 中・四国アメリカ文学会 1998）参照。

- 5 「メタレプシス」とは、Gérard Genette の用語で「虚構レベルの異なる二世界のあいだで境界侵犯が起こる」(若島 239) 現象。
- 6 このように見ていくと、Bruno と Ransom の関係が、Dr. Death と Tackie の関係とパラレルになっており、Bruno もまた、Tackie のメンターとして機能していると考えられる。ここでも、物語内と物語外の世界の相互作用を読み取ることができる。
- 7 先に指摘したようにこの物語は、フィクションであるということを意識させるよう語られている。浅羽通明は、「デス博士やランサム船長がタッキー少年の再読で甦るように、タッキー自身も我々の再読で甦る。だったら、我々も物語内存在かもしれない」(179) と述べ、佐々木も、

このラストが衝撃的なのは、単に「きみ=タッキー」もまた「物語内の人物」であるという端的な事実を効果的に言い立ててみせているからだけではない。(中略) ウルフのたくらみが恐ろしいのは、他ならぬ「きみ」という二人称の採用によって、デス博士の最後の台詞が示す反転が、デス博士と少年タッキーの間のみならず、「デス博士の島その他の物語」の「作者」(言うまでもないことだが、それは「ジーン・ウルフ」とはまた別個の存在である) と「きみ」との間でも、そして「作者」と「読者」の間でも成立し得るのではないかと思わせるからに他ならない。ここでの「きみ」とは「読者」のこともあるのだ。(196-97)

と、この物語が読者をも物語内存在として取り込んでしまう可能性を示唆している。浅羽通明『時間ループ物語論』(洋泉社 2012) 参照。

引用文献

- Oxford English Dictionary* 2nd ed. on CD-ROM. New York: Oxford UP, 2009.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little, Brown and Company, 1951.
- Twain, Mark. *The Prince and the Pauper*. New York: Oxford UP, 1996.
- Wolfe, Gene. “The Island of Doctor Death and Other Stories.” in *The Island of Doctor Death and Other Stories and Other Stories*. New York: A Tom Doherty Associates Book, 1997.
- 新田玲子『クラフツマン・サリンジャーの挑戦 サリンジャーなんかこわくない—テキストの重層化とポストモダンの試み』大阪教育図書 2004年
- 佐々木敦『あなたは今、この文章を読んでいる。—パラフィクションの誕生』慶應義塾大学出版会 2014年
- 田村晃康「<イニシエーション>という用語—その意味のあいまいさと問題点」『中京英文学』第5号 中京大学文学部英文学研究会 1985年
- 柳下毅一郎「ジーン・ウルフ特集 解説」『SF マガジン』2004年10月号 早川書房 2004年
- 吉田純子『少年たちのアメリカ—思春期文学の帝国と<男>』阿吽社 2004年
- 若島正「『デス博士の島その他の物語』ノート」『乱視読者のSF講義』国書刊行会 2011年

## A Study of “The Island of Doctor Death and Other Stories”: Wolfe’s Attempt to Protect Innocence

Osamu Yamaguchi

For young America, “innocence and experience” is an important theme in American literature. America was born as an innocent country free from the Old World’s sin, but, as Junko Yoshida argues, America had to lose its innocence as it became experienced.

American writers have tried hard to resolve this contradiction. To keep their innocence, Mark Twain’s Huck escaped into the Indian territory and J. D. Salinger’s Holden had to be in a hospital apart from the world, but eventually they have to face reality.

Tackie in Gene Wolfe’s “The Island of Doctor Death and Other Stories” shows another example of keeping its innocence. It is an initiation story, and a mentor plays a key role in it, like Jim for Huck. To grow up mentally, Tackie has to experience the world, but his innocence is protected by his mentor Dr. Death, who is a character in the novel *The Island of Doctor Death* which Tackie is reading. He guides Tackie so as not to experience evil things directly and alludes to the relativity of good and evil. As a result, Tackie learns of the existence of malice in the world, but his experience isn’t enough to change his sense of value. A noteworthy characteristic of the story is that, though Tackie experiences, his innocence is maintained.

Dr. Death plays another important role: he suggests he may die at the end of the novel, but he says “if you start the book again we’ll all be back.” It means that, unlike the stories of Huck and Holden, Dr. Death leads us, as readers, to read Tackie’s story as a never ending escape from facing reality. By connecting the end of the novel to the beginning, by using a metafictional technique, Wolfe succeeds in keeping Tackie’s innocence in the novel.